

オセアニア

多くの島々により形成されているオセアニアの国々。1972年西サモアに初めて隊員がその地を踏んだ時から協力隊の活動が開始された。当初、どのような協力が可能かという調査も兼ね、隊員派遣は資質に重点をおき、少数精鋭をもって実施されている。島国という条件から水産分野を中心に、農業や土木施工など、息の長い協力活動が現在も続いている。環境を活かし、現金収入を得るための可能性を探る調査と研究。村民の急願であり生活向上を目指して架けられた人道橋の建設。これらは隊員たちが貢献した仕事のほんの一部に過ぎない。

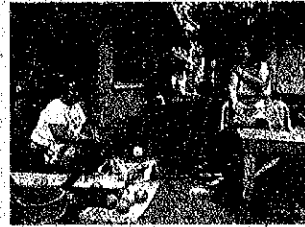
パプア・ニューギニア
1980年派遣開始



ソロモン諸島
1979年派遣開始



ミクロネシア
1989年派遣開始



ミクロネシア連邦



マーシャル諸島

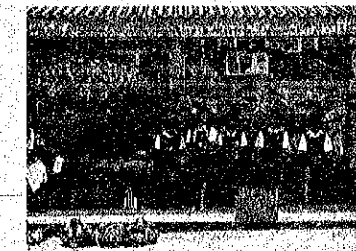
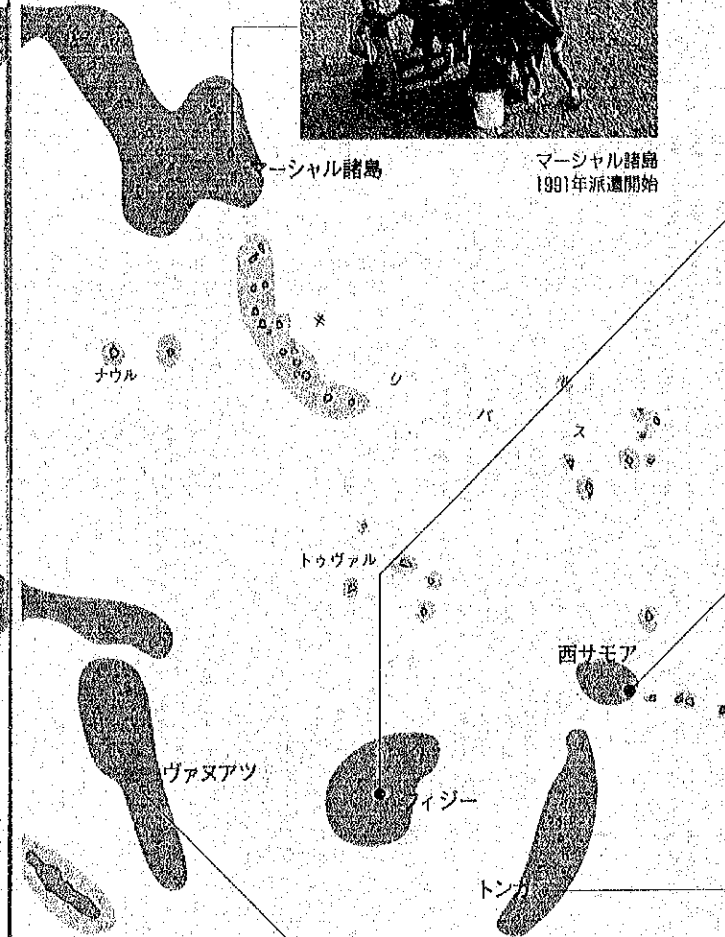
マーシャル諸島
1991年派遣開始



フィジー
1983年派遣開始



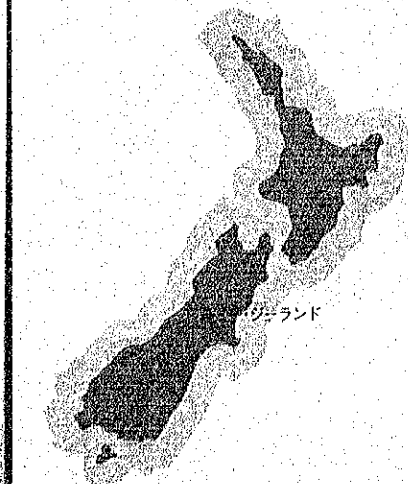
西サモア
1972年派遣開始



トンガ
1973年派遣開始



バヌアツ
1980年派遣開始



ジブラルタル

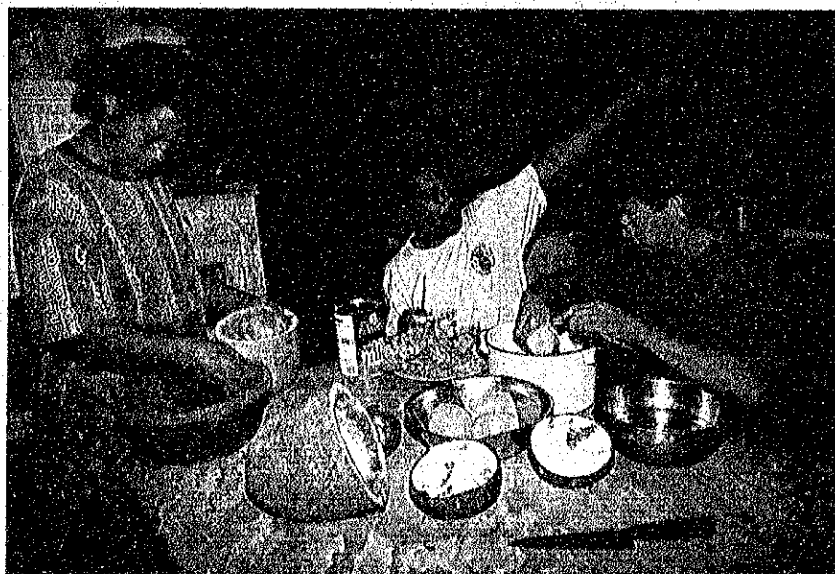
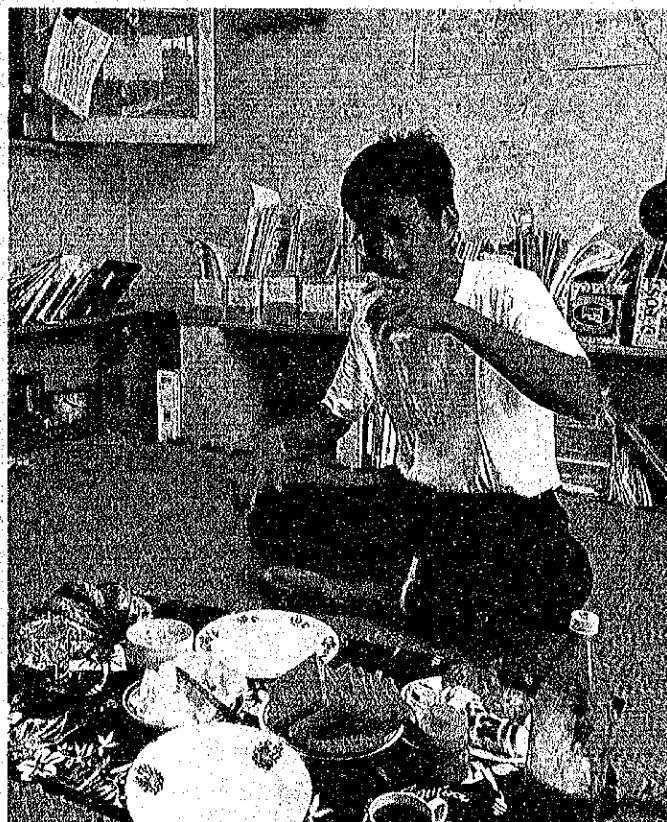
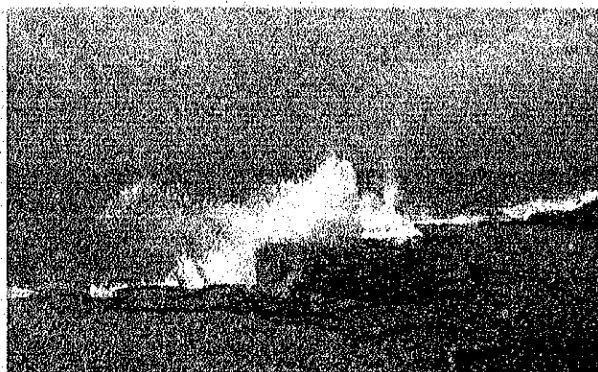
トンガ

美しい太平洋の島国 貝の養殖、ソロバンの教育に 隊員たちはここでも光っていた

南太平洋の島国トンガ。ここに貝の養殖の可能性を調査、研究にやってきた隊員が、トンガの魅力と仕事の魅力の虜になって、いつしか4年の歳月が流れた。悪戦苦闘の努力の結果、貝の養殖は成功し、美しい島国にもうひとつ新しい特産物が加わったのだ。それは、隊員とトンガの人々の輝かしい協力の結晶といえよう。

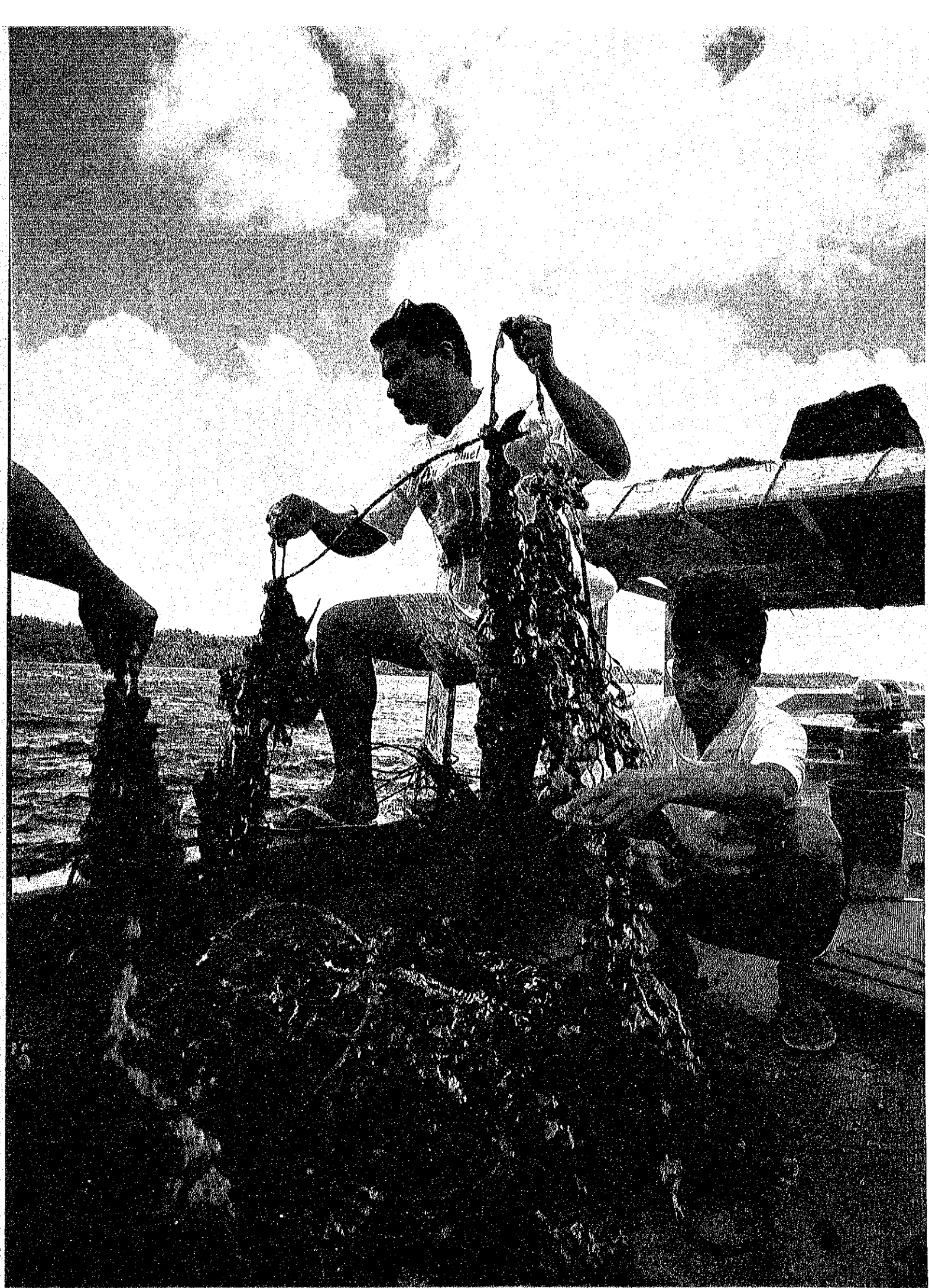
トンガに日本のソロバンがやって来たのは30年程前。数学に造詣の深い国王が、日本からソロバンを取り寄せ、自ら子供たちに指導したのが始まりだという。現在は教育省のカリキュラムとして小学校の授業にまでなっている。教員養成学校に、ソロバン指導の隊員が配属され教鞭を執りながら、1年に4回、離島を含む全国の小学校で巡回指導を続けている。

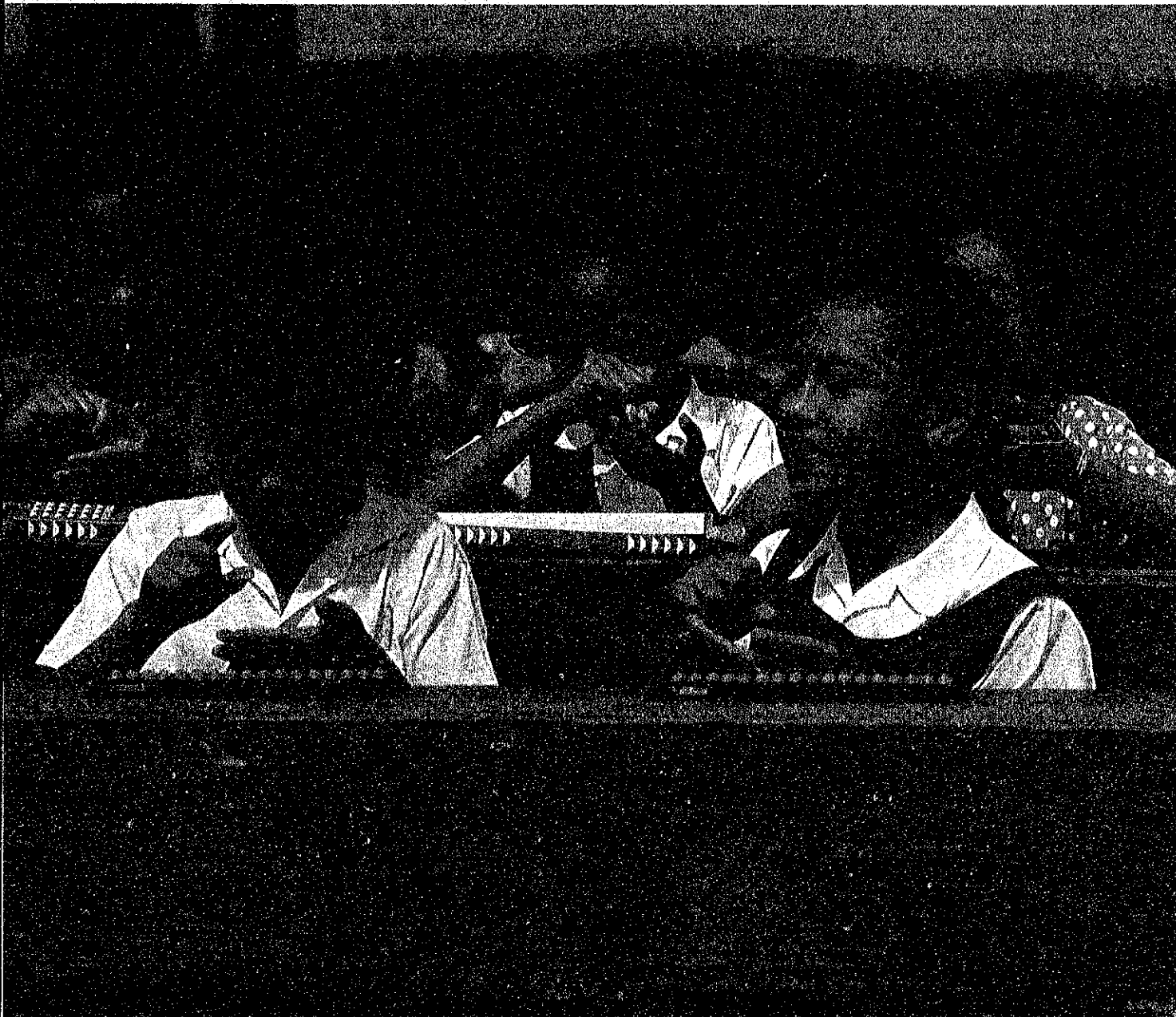
隊員の当初の悩みは肝心のソロバンの不足。その状況を改善するために日本のラジオ局が呼びかけ、多くのソロバンが寄付された。民間レベルの国際親善にまで、協力活動が発展したのである。



「4年間価値ある仕事
できました」と
自信満々に話してくれた

トンガ水産省ババウ支局で貝養殖の可能性、貝類の資源回復・維持に関する調査と研究に携わった桑正幸隊員が、その4年間の協力活動を終えようとしていた。「4年間で一番うれしかったのは、貝の養殖試験でよい結果が出せたことでした。」仕事の時に使う流暢なトンガ語とちがひ、日本語をかみしめるように語ってくれた





それに皆、ソロバンを
大切に扱ってくれるんです

「子供たちが楽しんでソロバンをやっている姿は、何より励みになります」と、トンガ教員養成学校でソロバンを教える吉田健志隊員。小学校を訪ねて生徒たちに直接ソロバンの指導をしていた。「来年はもっと多くの学校をまわって、たくさんの子供たちに教えたい。」隊員はそう付け加えた。(前頁上) ソロバンの競技会に生徒たちと向かう。参加する子供たちには楽しみ、勉強の目標に、指導する教師にも励みとなっている。(前頁中央) 隊員の「トンガの父」こと同僚のオブア氏と打合せ

カメラマンノート ⑤ 佐藤浩治

今回取材する機会を与えられたフィジーとトンガは、南太平洋のほぼ中央に位置する常夏の南国。どちらの国にも共通して感じられたのは、治安の良さと明るくおらかな国民性。それはのんびりとした南国のイメージそのものだった。
そんな南国の地で出会った隊員たちは、現地の人たちの優しさとおおらかさの中で、ひたむきに頑張っていた。
「任期を延長して4年間。時間のかかる試験、研究と試行錯誤の繰り返しでしたが、価値ある仕事ができました」と自顧満々に語ってくれた隊員

関近の賛助隊員。
「仕事で村を訪れるたびに、駆け寄って来る子供たちの笑顔は毎日の活力。村人の友情は何よりの宝です」という土木施工隊員。
のんびりと過ぎて行く時の中で、人々と同じ時を共有し、限られた時の中で何かを残そうとする隊員たち。「教えることよりも教わることの方が多い」と皆一様に口を揃える。今日も村人とヤンゴナ(カヴァ)の杯を重ねながら、夜更けまで語りあう。そんなことを考える時、南国の熱い空気と潮の香りが記憶の底に刻まれる。

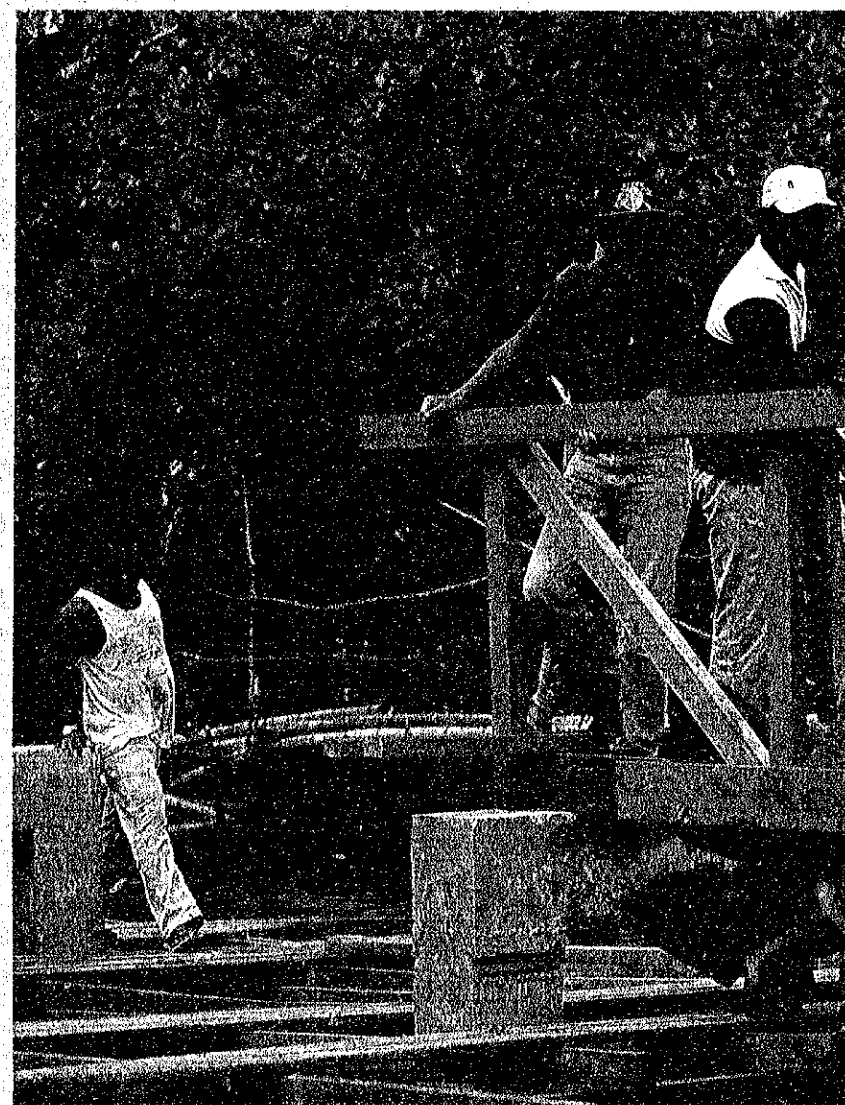
フィジー

何キロも、何時間もかかって 歩くしかなかった 隊員はフィジーの人々の かけ橋となった

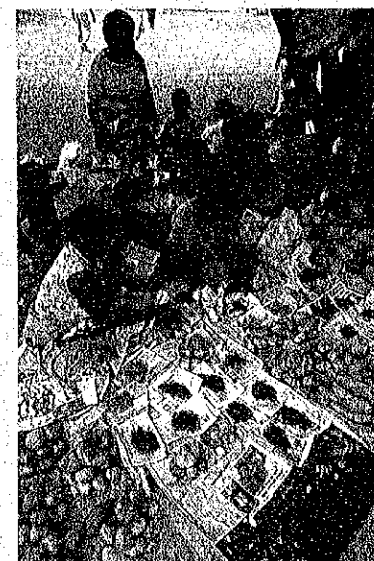
村人にとって、小学校や病院のある川向こうの隣町へ行くために、橋をかけることが長年の夢であった。

年間の降水量が多く、ハリケーンの訪れるこの地では、耐久性のある丈夫な橋が必要である。雨季になると河川の水量は増し、それまであった橋は流され、水面下に沈んでしまうこともしばしばあり、流されない橋を造るのが村人の夢であった。

フィジーは現在、諸外国からの技術の導入や文化交流などが盛んである。地理的にも、将来南太平洋の拠点となりうる存在である。小さな橋が大きな未来につながるのだ。土木施工の隊員たちの協力活動の結果、橋が何本も完成された。この国ではかの協力活動が続ける隊員たちも、日本とフィジー、フィジーと世界、そして未来へのかけ橋となることを望んでいる。



（右）フィジーの伝統的な踊りメケ。
（右下）街のマーケットには取りたてのフルーツが並ぶ



子供たちが
「クマツ、クマツ!」って
声をかけてくれたのが
毎日の活力源でした

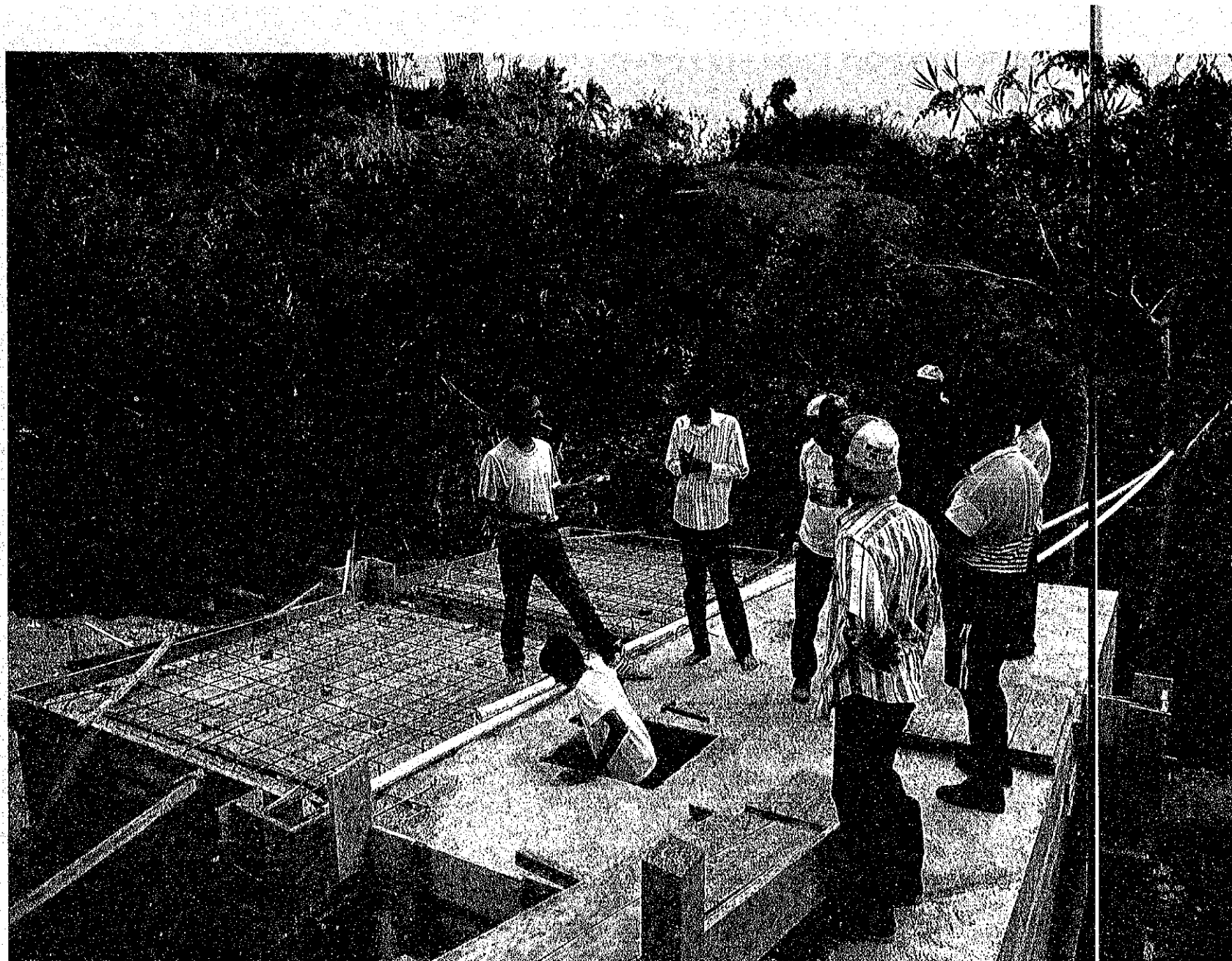
すでに5本の橋を建設した土木施工の藤田昌孝隊員。前任者より引き継いだフィジーで一番長い人道橋ナイカワング橋が完成した。それは、長い間村人たちの念願であった。船でなければ行き来できなかった小学校や病院が身近になったのである。今でも村を訪ねると、村人総出で歓迎してくれるという。（左下）子供たちとナイカワング橋を渡る隊員。（右下）歓迎を意味するカヴァの儀式を受ける隊員。写真中央の飲み物をカヴァといい、コショウ科の木の根を乾燥させ、砕いたものを水に溶かして作る



村人の友情
それがフィジーでの
一番の宝物です

土木施工の大塚清喜隊員が橋の工事を手がけたコロボウ村を訪れた。村中で大歓迎を受け、フィジー料理に舌づつみをうつ





フィジーの人はとにかくでっかい
とても陽気で、すぐ友達になれます
井戸の水はカルシウムなどが多過ぎて飲用に適さ
ない。土木施工指導の園田洋己隊員が、川をせき
止めダムから水を引いてウォータータンクを作り、
60戸の家へ全長8キロにわたるパイプを通す作業
に参加している。村では家々の庭先にタンクなど
を用意し乾季に備えていたが、これで一挙に各家
庭での水問題が解決した



ラグビーがトップクラスの
フィジーでレフェリーが
できるのは幸せです

教育・婦人・文化・科学技術省 FIT
日A分校で電気科の学生に教鞭を執る
藤原竹志隊員。教室の設備も充実し、
現在は日本の工業高校以上の授業がで
きるようになった。また、もうひとつ
の協力活動はラグビー指導の経験を活
かし、フィジーのラグビー協会に所属、
上級レフェリーとして活躍しているこ
とである。TV放送された国際試合の
レフェリーも務めて、今ではどこでも
人気者だ



週末家にいると
スタッフから昼食の招待を
よく受けます

ウォータータンクを作るため、測量中の土木
施工の村上啓一隊員。フィジーに来てから本
格的な自然を経験、週末には招待も受けるが、
自ら料理に挑戦している

